

【審査論文】

宮本百合子「貧しき人々の群」と田山花袋『重右衛門の最後』

——二つの上昇期における全体性への志向——

小堀洋平

Miyamoto Yuriko's *Mazushiki Hitobito no Mure* and *Tayama Katai's Juemon no Saigo*

KOBORI Yohei

キーワード： 田山花袋 宮本百合子 自然主義 プロレタリア文学

一 はじめに

『中央公論』三二年一〇号(一九一六年九月)は、その巻末に大附録小説と題して正宗白鳥「死者生者」、田山花袋「山荘にひとりゐて」、宮本百合子「貧しき人々の群」、上司小剣「二代目」、徳田秋声「犠牲者」の五編を掲載した。四人の自然主義作家のなかに、新人の百合子が立ち交じたかたちである。このことは、初期プロレタリア文学の代表作「貧しき人々の群」を、自然主義文学との関係のなかに位置づける必要性を示唆している。すでに窪川鶴次郎は、「人道主義思潮の文学において真の意味で自然主義文学を「受けつぐ」ことのできたものは彼女の文学であった」と述べている。窪川はまた、「貧しき人々の群」と自然主義系統の農民文学である真山青果「南小泉村」(『新潮』一九〇七年五月)や長塚節「土」(『東京朝日新聞』一九一〇年六月一三日〜一月一七日)との関係を検討する必要性を提起している。にもかかわらず、その後の研究においては、当時の百合子の日記でたびたび

言及されるトルストイ受容の検討に努力が集中されてきた一方で、日本文学内部での先行テキストとの関係については個別具体的な研究が乏しい状況が続いていた³。そのなかで、川端俊英が本作の「獣」イメージに注目し、それを初期社会主義文学の佳作のひとつである白柳秀湖「馱夫日記」(『新小説』一九〇七年一二月)とともに、島崎藤村『破戒』(一九〇六年三月、上田屋)と比較したのは当を得ている⁴。

だが、これらの作品とともに、「貧しき人々の群」と比較されるべき自然主義文学の代表的テキストがある。「貧しき人々の群」と同時に「山荘にひとりゐて」を発表した花袋の、前期自然主義時代の小説『重右衛門の最後』(一九〇二年五月一〇日、新声社)がそれである。両テキストの間には、資本主義化しつつある農村を訪れる都市知識人と農村周縁の「獣」的人物、その人物の結末における突然の死、さらに知識人を一人称の語り手としつつもその視点の限界を超えて対象全体を捉えようとする語りの傾向など、内容・

形式ともに多くの類似点が認められる。

ただし、ここで主張したいのは、百合子が『重右衛門の最後』を読んで「貧しき人々の群」を書いた、という意味での影響関係ではない。几帳面な読書記録を含む当時の百合子の日記に『重右衛門の最後』への言及はなく、百合子はそれを読んでいなかったと思われる⁵。本稿で検討されるのは、そのような作者どうしの主観的影響関係を越えたところにある、テクスト間の文学史的な継承関係である。窪川がいちはやく指摘した「貧しき人々の群」における自然主義の「受けつぎ」ということも、このような文学史的意味で述べられたものであった。

二 「貧しき人々の群」における「私」

両テクストのいくつかの類似点のうち、本稿では主に形式上のそれについて——とはいってもあくまで内容との関係において——検討したい。なお、歴史的比較においてはより高い発展段階にあるものからその前段階のものを理解するべきであるという原則に従い、「貧しき人々の群」から検討を始める。「貧しき人々の群」の「私」は、この小説において中心的でもあれば周縁的でもある二重の性質を備えている。中心的であるというのは、この小説の主題は明らかに、知識人としての「私」が「貧しき人々」に対してどのような態度をとるべきかという問題を考えぬくなかで成長してゆく過程にあるからである。一方、周縁的であるというのは、「私」が夏休みにしか村を訪れない地主の娘として、村の「貧しき人々」のなかに十分に入ってゆくことができず、最後までかれらの外側にいる存在に止まるからである。

この確認は、本作の語りの形式を理解するためにも役立つ。「貧しき人々の群」の「私」は、自分自身について物語る自叙伝的な語り手と、農村の人々の身に起こる様々な出来事をそこから距離をとって物語る周縁的な語り手と

いう二重の機能を担っている。そして、この周縁的な一人称の語り手「私」は、ときに三人称的な局外の語り手と相互に移行することがある。

ところで、物語り状況の類型学を構想したシュタンツェルは、従来の一人称小説と三人称小説の区分を、語り手と語られた世界との存在領域が一致するか否かという観点から定式化し、物語世界とその存在領域が一致する一人称小説の語り手「私」にとつては、芸術的效果を狙って「審美的」動機から物語る三人称小説の局外の語り手の場合とは対照的に、物語行為に対する動機づけが「実存的」なものとなる必然性を指摘している。「語り手たる「私」の物語行為が、作中に描かれる現実のなかの実存的条件に縛られているという状況」のもと、「一人称形式で物語られることはすべて、一人称の語り手にとつてなにかしら実存的に有意義な事柄である」⁷

この観点からすれば、「貧しき人々の群」における物語り状況の基礎および収束点は、物語世界の外にいる局外の語り手ではなく、その中にいる「私」であるといえる⁸。なぜなら、本作の一部における局外の語り手による物語り状況の採用は、語り手「私」が「貧しき人々」のことを「私」自身の制限された視点に縛られずに十全に知りたいという「実存的」欲求によるものと解釈でき、そのようにして擬似的な局外の語り手とおして伝えられた「貧しき人々」の状況は、ふたたび語り手「私」をその人々に対する自らの態度の「実存的」反省に導くからである。(以上の点については、表1参照)

表1 『貧しき人々の群』各章の物語り状況と内容

章	物語り状況	内容
1	局外	小作人甚助の家での食べ物をめぐる子供たちの喧嘩。
2	私	私は子供たちに同情して声をかけるが、激しい反発に遭う。
3	私	私は反発された理由を考え、自分の態度を反省する。
4	私	私の地主の娘としての境遇。甚助の子供たちが母親に連れられて謝罪に来る。
5	局外	村の子供たちに弄られる善馬鹿とそれを止めに入る水車屋の新さん。
6	局外→私	善馬鹿の家族。→善馬鹿の母親にものを与えたのを機に、私のもとに貧しい人々が訪ねて来るようになる。善馬鹿の知的障害をもつ子への私の同情。
7	私	夏の朝の風景。小学校時代の地主的傲慢への反省。村の子供たちへの声かけと、彼らの反発。
8	局外→私	農民の子供たちの不十分な教育状況。→私の善馬鹿の子への声かけ。貧しい人々への尽力。
9	私	農村の夏の風景。私の「農民的生活」。甚助が私の家に畑泥棒に入るが、私はそのまま帰らせる。
10	私	私のほどこしが畑泥棒を助長したことへの反省。ある夜、子供が杏を盗みに来るが逃げ出す。

章	物語り状況	内容
11	私	酒精中毒の桶屋が金の無心に来る。ものを貰いに来る人々への私の途方に暮れた感情。
12	局外	町の婦人たちの慈善事業の計画。
13	私	慈善事業に対する私の疑問。強欲な母親に虐げられる新さんについての噂話。
14	私→局外	私は慈善事業に来る婦人たちを目にする。→桶屋への見舞金。善馬鹿一家に戸惑い、村人たちに野次りたおされる婦人たち。
15	私→局外	私のもとに村人からもたらされる慈善事業の顛末。私自身の行為への反省。→見舞金による居酒屋の繁盛。そこでの村人たちと善馬鹿、新さんの会話。
16	私→局外	私の家に善馬鹿が酒を貰いに来る。→新さんの病気が悪化する。母親との和解は失敗する。
17	私→局外	秋が近づく。暴風の日、家にこもる私の家の者たち。→暴風の中に現れた二人の人影（実は善馬鹿と新さん）。
18	局外	翌朝、村の子供たちが新さんの絵死体を発見する。善馬鹿も死んだらしい。
19	局外→私	村中の混乱。→その話を聞いた私の反省と決意。

あるいは、「私」が「本来」知ることのできない「貧しき人々」をめぐる出来事をまるで見てきたように物語る行為は、原則主義的な物語論の立場からは疑問視されるかもしれない。だが、そのような行為は、語り手「私」が「貧しき人々」の生活を具体的に生きいきと想像し、そのことをとおしてかれらとのより良い関係を築こうとする努力の、不可欠の一部をなしているのである。この点については、シュタンツェルによる以下の批判が参照されるべきであろう。

大部分の批評家や理論家たちが考えているような一人称小説の語り手の役割は、〈局外の語り手〉の役割と全く同様に、型にはまった見方から解放される必要がある。型にはまった考え方は、さまざまな写実主義的かつ自然主義的な綱領から生まれてくる。つまり、そのような綱領に則れば、語り手はもっぱら自らの経験、実地検分、良心的な追跡調査を通じて知るところとなった事実の忠実な再現に、専念すべきものと考えられるのである。しかしながら文学的な一人称の語り手は、往々にしてこのような綱領や規定をあまり意に介することもなく、また自ら体験した事柄の良心的な報告者という役目だけに満足することもなく、本来は物語の創造者たる作者のみに帰属するところの特権をも主張したのである。かくして多くの一人称の語り手は、自ら経験した事柄の筆記という領分を大きく踏み越えて、自らの想像力のなから物語を蘇生させる。¹⁰

ところで、「貧しき人々の群」では、シュタンツェルの三つの典型的な物語り状況のうち、「私」の語る物語り状況と局外の語り手による物語り状況は見られるが、作中人物に反映した物語り状況、すなわち三人称で指示されるひとりの作中人物の視点に限定された語りは、あまり見られないという特徴がある。「私」にしろ、局外の語り手にしろ、物語世界を全体として把握しようとする語り手の人物が優勢であり、特定の制限された視点に立つてそ

これから出ようとしなない映し手的人物が現れることは少ないのである。

たとえば、作品冒頭は次のように書き出されている。「村の南北に通じる往還に沿つて、一軒の農家がある。人間の住居と云ふよりも、寧ろ何かの巢と云つた方が、余程適当して居る程穢ない家の中は、窓が少ないので非常に暗い。」ここでは、「村」からそれを貫く「往還」へ、「往還」からそれに沿つた「一軒の農家」へ、そしてその「家の中」へという順序で、全体から部分へと向かつて大局的な視点から語る、局外の語り手の存在が感じられる。たしかに、次の箇所では、「三坪程の土間には、家中の雑具が散らかつて、梁の上の暑さうな鳥屋とやでは、産褥とやに居る牝鶏のク、ク、ク、と喉を鳴らして居るのが聞える」というかたちで、「聞く」知覚主体としての無名の映し手がつかのま顔を出している。だが、そのような物語り状況は長続きしない。局外の語り手なしにはあり得ない特徴的な叙述が、すぐに現れる。

子供等は年中腹を空かして居る。腹が張ると云ふ事を曾てちつとも知らない彼等は、明けても暮れても「食い度いく」と云ふ欲にばかり攻められて、食物の事になると、自分等の本性を失つて、がつがつする。

今も彼等は三人が三人、同じ様に「若し俺ら独りで、此丈こんだの薯が食へたらなあ」と思ひ、平常は居なければならぬ兄弟共も、此那時には何と云ふ邪魔になる事かと、しみじみと感じて居たのである。それだもんで、いつの間にか鶏共が俵の破れから嘴を突込んで、常に親父から、一粒でも勿体なくすると目が潰れるぞと、かたく戒められて居る米粒を、拾ひ食ひして居るの等に、気の付かう筈はなかつた。

鶏共と子供達とは、各自ごんごに自分等の食物の事許りに気を奪はれて居たのである。

ここで語り手は、「年中」「曾てちつとも」「明けても暮れても」といった表現によって、子供たちの置かれた貧困の状況を長い時間的幅のなかで捉え

てみせる。これは、現場性に縛られた映し手的人物には不可能であり、状況を全体として把握している局外の語り手にしてはじめて可能となる語り方である。作中人物の意識との関係からしても、「彼等は三人が三人、同じ様に……と思ひ、……と、しみじみと感じて居たのである」という三人の子供たちの内面を等しく見通す語り方、同様の「鶏共と子供達とは、……気を奪はれて居たのである」という総括的な調子、さらに「……に、気の付かう筈はなかつた」という作中人物の意識していない事柄の語り手による説明など、すべて物語世界内の映し手的人物をとおしてはありえず、局外の語り手の存在を前提とする叙法である。そして、このような子供たちの場面が語られた後に、一行空きを挟んで「此れは、町に地主を持つて、其の持畑に働いて居る、甚助と云ふ小作男の家での事である。」という一文が来る。ここまでの場面を「此れ」の一語でまとめて受け、それを一挙に「地主」―「小作」関係と結びつけてみせる第一章最後のこの一文は、冒頭場面を農村の全体状況のなかにまると位置づけようとする語り手の存在を、あらためて読者に印象づけるものとなっている。

物語の叙法における「語り手」と「映し手」という両極について、シュタインツェルは次のように述べている。「両極の一方は、媒介性という本来の意味での〈語り〉であり、他方は、作中人物の意識の中に虚構の現実を映し出すという意味での〈描出〉である。前者の場合、読者はひとりの人格化された語り手に相対しているように思うが、後者では、読者は虚構の世界をそのままじかに知覚しているような錯覚を抱く。」¹⁾したがって、上記の特徴は、ごく普通の用語で言つて、本作が「描写」的ではなく「説明」的である、という印象につながる。だが、もちろんこのことは本作の短所とはならない。むしろその逆である。

この点については、ルカーチの古典的論文「物語か記述か」を参照するこ

とができる。ルカーチによれば、「物語」は「参加者」の立場からなされるのに対して、「記述」(「描写」と言い換えてもよい)は「傍観者」の立場からなされる¹²。「物語」を主要な方法とする作品を受容するとき、「われわれは、小説の作中人物が行為することによって関与している諸事件を読むのである。われわれはこれらの諸事件を体験するのである。」¹³一方、「記述」の場合には、「作中人物はそれ自身、多かれ少なかれ関心を抱いて諸事件を眺めている傍観者にすぎない。したがってこれらの諸事件は、読者にとつて一枚の絵というよりはむしろ、一連の絵となる。われわれはこの絵を観察することになるのである。」¹⁴

これらの箇所ではルカーチが考えている「物語」と「記述」の対立は、シュタンツェルにおける語り手と映し手の対立に関連づけることができる。小説における「隔たり」と「全体」についてのルカーチの著名な所説も、次に示すように、語り手と映し手という概念を用いて説明すると分かりやすい。――「物語」における語り手は、語られる出来事を結末から時間的隔たりをもつて振り返ることのできる全体として知っているが、「記述」における映し手は、映される出来事と同時的であるためにその発展の全体を知ることができない。「人は過ぎ去ったことを物語り、目の前に見ることを記述する。」¹⁵

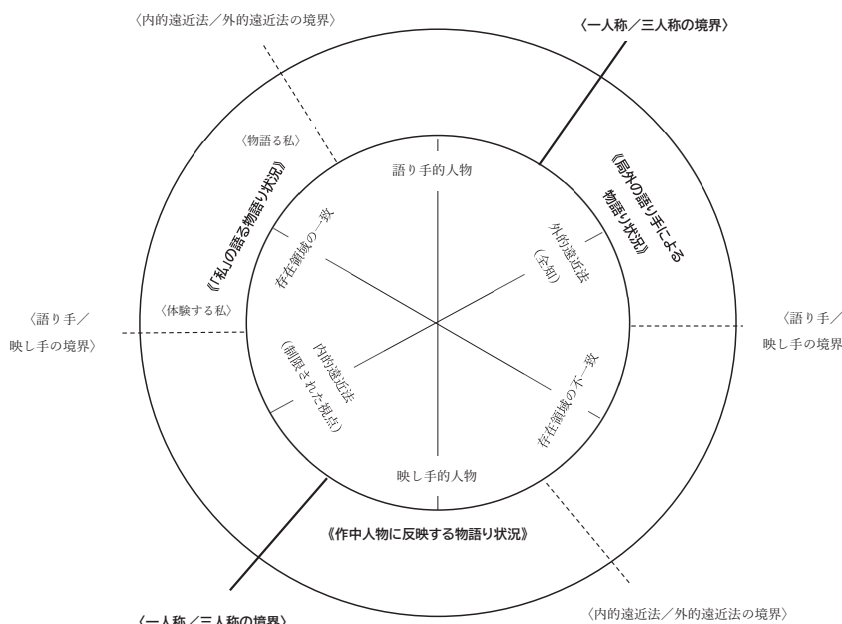
それでは、一見矛盾するかに見える「参加者」の立場に立った物語行為と、語られる出来事からの語り手の「隔たり」とは、どのように両立するののか。――語り手は、時間的「隔たり」をとおして事後的に出来事の全体を把握しつつ、その出来事の発展のなかで作中人物が選択した本質的行為を、その人物と同様に選択して語ることによって自ら「参加者」の立場に立つ。このようにして、外見上矛盾する「参加」と「隔たり」は、語り手において統一される。一方、映し手は、進行中の出来事のさなかにおり、その発展の全体に対する見通しを欠くため、その出来事に参加する本質的行為をおこなうこと

ができずに、「傍観者」の立場にとどまらざるをえない¹⁶。

なお、語られる出来事からの隔たりを保ちつつその出来事に自ら参加する語り手が、必ずしも三人称小説の局外の語り手とは限らないことを、ルカーチが次のように指摘しているのは、局外の語り手と「私」とが交替して現れる「貧しき人々の群」を評価する際に示唆的である。「この物語られる諸事件がもつ隔たりは、叙事文学の真の作家の場合には、一人称形式を選ぶときにも、また、作中のある人物が語り手として虚構されるときにも、存在するのである。」¹⁷

いや、むしろルカーチの想定する「物語」の語り手は、シュタンツェルの「局外の語り手」の理念型とは微妙にずれているともいえる。そもそも「局外」の語り手という言い方自体、「参加」と矛盾するように思われる。とりわけ、シュタンツェルが局外の語り手の動機を「審美的」とし、「私」の動機を「実存的」としたことを踏まえれば、ルカーチが想定する「参加者」の立場からの「物語」の語り手は、シュタンツェルの類型円図表において、「局外の語り手による物語り状況」の理念型から「私」の語る物語り状況」の理念型に向かつて円周上を移動した地点、三人称と一人称の境界線付近に位置すると考えられる(図1参照)。

そして、まさにそのような地点に、「貧しき人々の群」の語り手は位置づけられる。さきほど引用した第一章末尾につづく第二章冒頭は次のようである。「丁度其の時、私は甚助の小屋裏の畑地に出て居た。ブラ／＼歩いて其処まで来ると、思ひ掛けず子供等の様子が目に付いたので、傍の木陰から非常な興味を持つて、眺めて居た。そして薯の事から、喧嘩からすつかりを見て仕舞つたのである。」このようにして、局外の語り手は、周縁的な一人称の語り手「私」に移行する。



《「私」の語る物語り状況》では語り手と作中人物との「存在領域の一致」が、《局外の語り手による物語り状況》では語り手の全知をもたらす「外的遠近法」が、《作中人物に反映する物語り状況》では「映し手の人物」の視点に寄り添った叙法が、それぞれ主要構成要素であることが示されている。同時に、主要構成要素の他に、その両側に位置する二つの要素（たとえば、《「私」の語る物語り状況》においては「語り手の人物」と「内的遠近法」も、副次的構成要素としてそれぞれの物語り状況の特性に関与することが示されている。

図1 類型円図表(シュタンツェル前掲書裏見返し掲載図による。一部改変)

だが、「貧しき人々の群」で特徴的なのは、この「私」が「眺める」あるいは「見る」存在に止まらず、「貧しき人々」に向かつて行動する存在となる——ルカーチの用語を使えば、「傍観者」から「参加者」へと変容することである。「私」は、「始めて甚助の家へ入つて見たのである。」そして「私」は、子供たちに「父さんや母さんは？ 淋しいだらう？」「淋しいだらうね、だあれも居ないで」と声をかける。ところが、かれらから返ってきたのは、「おめえの世話にはなんねえぞ——ッ」という「思ひがけない怒罵の声」であった¹⁸。これに続く、「私」の動揺した内面が語られる箇所は、「貧しき人々の群」の語りにおける「私」の位相をよく示している。

私は寛容でなければならぬ。彼等から一歩立ち勝つた者の持つ落着きを保ち続けようとする虚栄心が臆病に成りきつた心を鞭撻した。けれども空虚になつた様な頭には何を判断する力もなくなり、歯がガチ／＼と口の中で鳴つて居る。

ここにあるのは、シュタンツェルのいう「体験する私」(主人公としての「私」と「物語る私」(語り手としての「私」)の内的緊張関係である。「私」は寛容でなければならぬ。」の一文は、「体験する私」の思考を体験話法の形式で再現している。だが、その思考内容は、ただちに「物語る私」によって批判的に相対化され、「体験する私」の「寛容」への努力は、「彼等から一歩立ち勝つた者の持つ落着きを保ち続けようとする虚栄心」によるものであることが明らかにされる。しかも、「体験する私」にとつて「寛容」への努力は何の功も奏さなかつたことが、最後の一文で示される。ここでは、語りの焦点が心理から身体へと移され、「歯がガチ／＼と口の中で鳴つて居る」という「私」自身の意に任せない反応が示されることによつても、「物語る私」による「体験する私」の想念のアイロニカルな相対化が強調されている¹⁹。

もしここで、「体験する私」に密着した語りしか現れなかつたとすれば、

「私」の語る物語り状況は、シュタンツェルの類型円図表における作中人物に反映する物語り状況の方向へと、あるいはルカーチの「記述」へと接近し、全体への視点は失われることになっただろう。だが、実際には、「体験する私」に密着した体験話法の直後の箇所、語り手的人物への揺り戻しが行われ、全体を志向する「物語」の方法が確保されているのである。

この後、第三章の「私」は、この出来事に対する自省のなかで、「私は間違つて居たのだ。彼等総ての貧しい人々の群に対して、自分は誤つて居た」と考えるに至る。シュタンツェルは、古典的タイプの一人称形式の教養小説によく見られる「私」という人物に備わる道徳的人格の全面的な変貌¹⁹、かつての「私」という存在からの転身の現象を指摘し、変貌・転身前の「体験する私」から後の「物語る私」への「心理的統合」の過程が自叙伝風一人称小説の重要な主題であると述べているが²⁰、それこそがまさに「貧しき人々の群」の主題となっている。この後、第四章の冒頭では、「私は、自分の生活の改革が、非常に必要であるのを感じた」と「私」の転身への意志が語られ、その意志に基づいて、「私共の先代」の頃からの「K村」の変遷および現在の状況の全体的説明が導入されている。「貧しき人々」との関係のなかで生じた「私」の「生活の改革」への意志が、農村の状況を全体として把握しようとする語りの方を規定しているのである。

伊藤野枝は、「貧しき人々の群」のなかに「新しい自分の生活に対しての真面目な自省、農民達の生活に対するゆるみのない注意、何物に向つても最後まで見届けようとする努力²¹」を見てとつたが、これは、「実存的」要求にもとづく「私」の物語と、局外の語り手による幅広い農民生活の物語、そして前者から後者への移行を動機づける全体性への志向を、いち早く直観した評言であった。

ここで、ルカーチによる「全体性」の概念規定を参照しておくことも、無

意味ではあるまい。ルカーチによれば、作品における「全体性」とは、形象化された作中人物の存在と運動、特質と立場を、その人生の過程全体をとおして決定するような諸規定の総体である²²。したがって、語り手にとつての全体性への志向とは、主人公がどのような人間であるか、あるいはどのような人間になるかを決定する物語世界の様々な要素を、全体として読者に伝えようとする意思であるといえる。そして、語り手＝主人公のタイプの小説においては、語り手が自らの人生、自らが生きる世界に対して、そのような態度をとることになる。以上のような全体性への志向が、「貧しき人々の群」の「私」の語りの形式を基礎づけているのである。

さらに、先取りしていえば、このような全体性への志向は、花袋の『重右衛門の最後』の語り手「自分」にも認められる。次の第三節では、『重右衛門の最後』における全体性への志向の存在を明らかにし、続く第四節では、そのような共通性にもかかわらず両テクストの間に存在する、全体性の内実の相違を分析することにした。

三 『重右衛門の最後』における「自分」

『重右衛門の最後』の語り手は、入れ子構造になっている。全二二章のうち、第一章が全体の枠をなす導入部の語り手によるもの、第二章以降がその第一章に現れた「なにがしといふ男」の一人称「自分」の語りによるもの、さらにそのうち第八章が、友人根本の話を「自分」が再話したものである。なお、その第八章のなかには、根本が関係者から聞いた話の「自分」による又聞きも含まれている。そのほか、第六章にも、根本ともう一人の友人山県の直接話法による比較的長い発話がある。

第二章以降で語られる基本的内容は、第一章の「なにがしといふ男」の発話箇所に先取的に示されたように、「自然の力と自然の姿」を体現した人物、

重右衛門と村との関係である。その物語は、訪れた村での「自分」の見聞——文字どおりに、自ら見たことと、他人から聞いたこととをもとにして、それを「自分」が想像力をはたらかせて組み立て、再話したものである²³。

ここで特徴的なのは、作中に、語り手「自分」の視点の制限を遵守しようとする傾向と、そのような制限を超えて、想像力の自由なはたらきによって物語ろうとする傾向とが、並存していることである。

視点遵守の傾向が盗み聞きや覗き見の手法として表れている一方、視点の制限を超出しようとする傾向は、とりわけ根本による物語の「自分」による再話の形式を採った第八章に著しい。たしかに、ここでも、視点遵守の傾向がまったく見られないわけではない。そこでは、各文末に「といふ」という伝聞形式が多用されている。また、語り手は、自分が物語世界の外にいる全知の存在ではなく、その中にいる一人の人物であることをふと思いついたかのように、「自分は根本行輔の口からこの物語を聞いて居るので」という注釈——というより聞き手への弁解を、わざわざ丸括弧つきでさしはさんでいる。

けれども、ここで基本的なのは、あくまでも制限超出の傾向である。それはとりわけ、重右衛門の思考やかれの他の人物たちとの会話が、かぎ括弧付きの直接話法の形式で示されるいくつかの重要な場面から看取される。いいかえれば、それらの箇所における重右衛門たちの過去の内言・外言の一字一句の「再」提示は、根本および「自分」の想像力による、視点制限の超出として解釈できるのである。

ここで再び、シュタントツェルの原則的批判を想起しよう。「大部分の批評家や理論家たちが考えているような一人称小説の語り手の役割は、〈局外の語り手〉の役割と全く同様に、型にはまった見方から解放される必要がある。型にはまった考え方は、さまざまな写実主義的かつ自然主義的な綱領から生まれてくる。」——文学史的には前期自然主義の代表作と目される『重右衛

門の最後』において、語り手「自分」は「自然主義的な綱領」を踏み越えた。ここでは、制限された視点から全知を志向する視点への踏み越えがなされているのである。

では、このような踏み越えは、語り手「自分」のどのような動機に基づいているのだろうか。それはさしあたり、重右衛門という人間を全体として聞き手に語って示そうとする「自分」の意志に基づいている、といえる。

だが、なぜ「自分」はそれほどまでに重右衛門という人間に惹きつけられたのか。それは、かれが「自分」の従前の「自然」観を更新する存在だったからである。

そもそも、「自分」が村を訪れたのは、「十年都会の塵にまみれ」あるいは「世の塵の深きに泥れ^{まみ}」てきた状況のなかで、「静かな村」に「自然の美」を探るためであった。ところが、いざ村に着いてみると、「自分」が接したのは静的な「自然の美」などでなく、重右衛門による「放火騒動^{ひつけさはぎ}」だった。「これは何か意味が無くてはならぬ。これは必ず不自然な事があつたに相違ないと自分は思った。」

だが、「自分」は村における見聞を経て、この「不自然」が実は「自然」にほかならないことを知る——というより、この「不自然」を新たに「自然」として意味づけることになるのである。最終章より一つ前の第十一章において、村人による重右衛門の死にまで至る私刑を受けて、「自分」は重右衛門を「濁った世」に受け容れられることのできない「自然児」として解釈する。「人間は完全に自然を發展すれば、必ずその最後は悲劇に終る。則ち自然その者は到底現世の義理人情に触着せずには終らぬ。さすれば自然その者は、遂にこの世に於て不自然と化したのか」²⁴だが、さらに注意すべきは、「六千年来の歴史、習慣。これが第二の自然を作るに於て、非常に有力である」というかたちで、重右衛門の「自然」に対立する「現世の義理人情」の掟もまた「第

二の「自然」として、いわば「自然」の弁証法的展開のなかに位置づけられていることである。²⁵重右衛門と村の掟との対立の様相は、「自分」の静的「自然」観を無効とし、第一の「自然」と第二の「自然」の抗争という新たな動的「自然」観を演出させた。ここで「自分」が発見した「自然」とは、重右衛門と村の掟とを包括し、それらを全体として意味づけることのできる概念装置にほかならない。

このように、重右衛門を対象とする語りにおける「自分」による視点制限超出の傾向は、重右衛門こそが「自分」の接した現実を「自然」という概念装置によって全体として把握するための契機となる存在であり、そのためにはかれの存在そのものを全体として語る必要があることから、生じてきたものだったのである。

四 「貧しき人々の群」と『重右衛門の最後』の文学史的関係

「貧しき人々の群」から二年あまり後、それまでの日本近代文学史の本流を自然主義から人道主義への展開に見、そのさらなる発展を要求する秋田雨雀の評論が発表された²⁶。雨雀によれば、自然主義は「その時代のすべての社会現象の観察に革命を与へた」が、「自然主義を穿きちがへたある一派の作家」(デカダン派)や「悪い意味のマテリアリズムを信じすぎる一部の思想家」によってその積極的意義を喪失した。自然主義の真の継承者は、「その時代の社会現象に最も直接的な希望と実行を起す」人道主義である。だが、その人道主義も、自然主義の遺産である「社会現象の観察」を十分に継承しなかったために、人生観の技巧的表白をこととする「新技巧派」の傾向に陥りつつある。このような文学状況において、「真人道主義」を実現するためには、作家は「時代」への「凝視」によって『人民』の「真実の声」を反映するものとならなければならない。

秋田雨雀の文学史観は、近代文学に三つの上昇期を想定している。第一に自然主義、第二に白樺派を中心とする「所謂」人道主義、そして第三に将来のプロレタリア文学へとつながる「真」人道主義である(図2参照)。

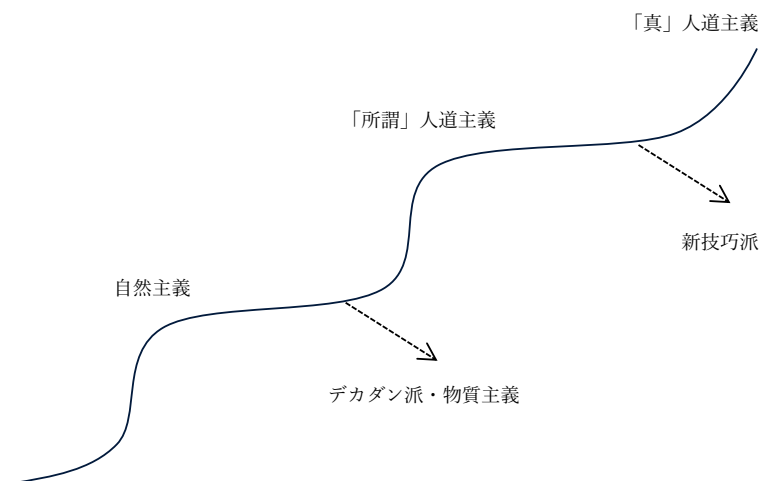


図2 秋田雨雀による日本近代文学の発展曲線

この発展曲線にあてはめれば、『重右衛門の最後』(一九〇二)は第一の上昇期に、「貧しき人々の群」(一九一六)は第三の上昇期に位置する代表的テキストである²⁷。両者の類似性の根拠は、ともに近代文学史上の上昇期を形成するテキストである点に、具体的には「その時代のすべての社会現象」を

全体として把握しようとする努力のうちに、求めることができる。それに対して、雨雀が下降的局面に位置つけた諸傾向は、全体性への志向の欠如を特徴とするものであった。すなわち、「自然主義を穿きちがへたある一派の作家」(デカダン派)は、人間を本能的なものに一面的に還元しようとする傾向として。「悪い意味のマテリアリズムを信じすぎる一部の思想家」は、精神から物質への反作用を認めない機械論的・決定論的な物質主義として。そして「新技巧派」は、自らの人生観に閉じこもって社会から目を逸らす傾向として。しかし、『重右衛門の最後』と「貧しき人々の群」の語りの形式には、大きな相違点も存在する。それは、両テクストの語り手の全体性に対する異なる関係に対応したものである。

『重右衛門の最後』の最終第十二章において、「自分」は、重右衛門と行動をともにした少女による村全体への放火と、その少女自身の焼死を聞き手に伝える。そして、それから七年後の現在、村が経済的に発展し、重右衛門と少女の墓が村の寺に建てられたことをエピソード風に語ったうえで、「自分」は「諸君、自然は竟に自然に帰った!」と呼びかけて物語を閉じる。

第一の「自然」を体現する重右衛門と少女は死に、「第二の自然」を体現する村は全体が放火されて、おそらくその大部分が灰燼に帰した。こうして、第一・第二の「自然」はともに滅びたかに見える。だが、エピソードで「自分」は「第二の自然」としての村の秩序の回復を語って、「自然は竟に自然に帰った」と叫ぶのである。ここでは、一つ前の第十一章で示されていた、動的な弁証法的「自然」観は失われている。「自然は竟に自然に帰った」という同語反復的な表現からもうかがえるように、ここで「自然」はその発展を停止し、「第二の自然」の秩序のうちにその安定を見出している。そして、このような把握のうちに、「自分」は「自然」を全体として認識し得たと考えているのである。²⁸「諸君、自然は竟に自然に帰った!」——その雄弁調の

なかには、このような完結したものととしての「自然」の見方が、かつての「自分」自身の「けれど自然は果して六千年の歴史の前に永久に降伏し終るであらうか」という問いと矛盾することへの自覚は感じられない。「自分」は全体としての「自然」を認識し得た、それを聞き手「諸君」に伝えるのだ——このような「自分」の最終的態度において、現実の全体的認識のこれ以上の発展可能性は閉ざされたのである。²⁹

ふりかえれば、雨雀は自然主義の積極的意義を「すべての社会現象の観察」の変革という点に認め、一方でその限界を、それがあくまで「観察」の変革に止まり、実際の「社会現象」の変革への「希望と実行」をもたらさなかった点に見ていた。つまり、自然主義のもたらした変革は認識面に止まって実践には及ばなかった、という批判である。だが、このような限界は、既に認識そのもののあり方に胚胎していることが、右の『重右衛門の最後』の語りの分析から明らかになる。歴史的に規定された現存の「社会現象」の秩序を、完結した、動かしがたい「自然」として認識し、しかもそのような認識自体を、完結した、動かしがたい真理であると見なすこと——そのような認識のあり方は、必然的に当の「社会現象」の変革可能性の否定をもたらす。結末で「自然」という概念装置によって現実の全体を認識し得たと考え、「諸君、自然は竟に自然に帰った!」と高らかに叫んだ瞬間に、「自分」は絶えず発展する現実の全体性の認識への道を自らに閉ざしたのであり、それは同時に現実の変革可能性の否定をも意味したのである。

一方、「貧しき人々の群」では、事態は異なっている。たしかに、形式上、「貧しき人々の群」においても、『重右衛門の最後』の「諸君」と同様、結末で頓呼法が多用されている、という共通点を指摘できる。知的障害をもつ「善馬鹿」と、母親から虐げられた水車屋の息子「新さん」の死を受けて、「私」はかれらを救えなかつた自分の無力を痛感する。その箇所、この二人に対

する呼称が、それまでの三人称「彼等」から二人称「お前方」へ変化するのである。「私は、お前方の前には、粟粒粒程もない人間だつたのだ。」さらに、次の箇所では、この二人称の指示対象がずらされたうえで、その人々への呼びかけがなされている。

けれども、どうぞ憎まないでください。私はきつと今に何か捕へる。どんなに小さいものでもお互に喜ぶことの出来るものを見つけて。どうぞそれまで待つておくれ。達者で働いておくれ！ 私の悲しい親友よ！

私は泣きながらも勉強する。一生懸命に励む。そして、今死なうと云ふ時でも好いから、ほんとうに打ちとけた、心置かない私とお前達が微笑み合ふ事が出来たらどんなに嬉しからう！ どんなにお天道様は御よろこびなさるか。

私の大好きな、私を育て、下さるお天道様はどんなに、「よしく。」と云つて下さるか！

あの好いお天道様が……………。

ここでは、二つのことが言える。一つは、『重右衛門の最後』では、重右衛門と少女は最終的に「自分」の「自然」認識の契機でしなくなり、呼びかけはかれらに対してではなく、聞き手「諸君」に対して行われることとなるが、「貧しき人々の群」では、呼びかけは物語世界内の人物たちに対してなされている、ということである。その一方で、「達者で働いておくれ！私の悲しい親友よ！」「心置かない私とお前達が微笑み合ふ事が出来たらどんなに嬉しからう！」という箇所での呼びかけの対象は、——善馬鹿と新さんはずでに死んでいるのだから——その二人ではなく、「貧しき人々」全体へとずらされ、拡張されている、ということがもう一つである。「私はきつと今に何か捕へる」という箇所からは、『重右衛門の最後』の「自分」とは異なり、「私」が現実の全体を現時点で認識し得たなどとはまったく考えてい

ないことが分かるが、それにもかかわらず、善馬鹿と新さんという個人は、「貧しき人々」という全体への「私」のまなざしのなかに、その姿を消してしまつたのだろうか。さらに、この箇所では、「物語る私」と「体験する私」の緊張関係もなくなり、「私」の思考内容がより大きな全体の立場から批判され、相対化されることもないのだろうか。

だが、この箇所には、次の一節が続いている。

善馬鹿の死骸は夜になつてから見つかつた。

隣村の端れの沼に犬を抱いて彼は溺れて居た。

沢山の小海老の行列が、延びた髪の毛の間を、出たり入つたりして居たと云ふ。

ここでは、「と云ふ」という伝聞形式によって「私」の語る物語り状況が、かろうじて保たれながらも、善馬鹿の遺体の髪の毛の小海老というひとつの細部によって、単なる伝聞以上の現実感もたらされ、局外の語り手による物語り状況への近接が感じられるようになっていく。「私」はけつして善馬鹿という人間を「貧しき人々」一般という全体のなかに解消してはならないことが、「私」の視点を越えたより大きな全体の立場から、この結末箇所に示されているのである³⁰。

あらためて確認すれば、『重右衛門の最後』と「貧しき人々の群」は、全体性への志向によって、一人称の語り手の制限された視点の超出と、局外の語り手による物語り状況への移行とが見られるという共通性を有しつつも、前者は現実の全体を最終的に語り手が認識し得たという形式をとることによつて閉ざされた結末をもち、後者はそのような全体認識があくまで未来におけるものとして残されることによつて開かれた結末をもつ。文学史的に見れば、「貧しき人々の群」は、全体性への志向を上昇期の自然主義文学の代表作『重右衛門の最後』から継承しつつも、全体性をそのテクストの内部に

において到達されたものとしては示さず、将来の文学の課題として残したところ、初期プロレタリア文学としての特質をもつということが出来る。

註

- 1 当時の姓は中條だが、本稿では今日一般に知られている宮本百合子の呼称を適及的に用いる。
- 2 窪川鶴次郎「一つのデッサン」(戸合俊一編『宮本百合子研究』一九五二年一月、春潮社)一〇一頁
- 3 トルストイ受容に関する主な論文は下記のとおり。林幸恵「初期におけるトルストイの影響——『貧しき人々の群』と『われら何をなすべきか』の関係を中心に——」(『多喜二・百合子研究会 会報』一九七一年五月、七月)、岩淵宏子「『貧しき人々の群』試論」(『国文目白』一九七八年二月)、沼沢和子「『貧しき人々の群』論——トルストイ受容をめぐる——」(『日本の近代文学』作家と作品)一九七八年二月、角川書店、格清久美子「一九一五年『日記』の〈空白〉——文壇登場期宮本百合子のトルストイ受容をめぐる——」(『名古屋近代文学研究』一九九六年二月)。なお、比較文学的検討は本稿の目的ではないため詳論は避けるが、『貧しき人々の群』とロシア文学との比較でいえば、当時の百合子日記にトルストイと並んで言及の見られるツルゲーネフ『獵人日記』との関係も重要だと考える。その場合、『貧しき人々の群』は、冒頭に『獵人日記』の明示的引用を含む『重右衛門の最後』と共通の材源をもつことになる。
- 4 川端俊英「宮本百合子『貧しき人々の群』に見る人間観」(『同朋大学論叢』一九九七年二月一日)六、一二頁
- 5 『宮本百合子全集』二六卷、二〇〇三年六月、新日本出版社
- 6 フランツ・K・シュタツェル『物語の構造 〈語り〉の理論とテキスト分析』前田彰一訳、一九九九年一月、岩波書店、八三頁
- 7 同前、八七頁。ここで「実存的」という用語は哲学上の実存主義を連想させるため、たとえば「世界観的」などと言いかえるべきかとも思われるが、シュタツェルの元の用語を尊重する。
- 8 瀬沼茂樹「解説」(『宮本百合子集』(新潮日本文学21)一九七三年一月、新潮社)が主体的語りによる客観的語りの包摂・統合として図式化し、格清久美子『貧しき人々の群』の虚構性——モデルおよび習作「農村」に照らして——(『近代文学研究』一九九七年二月)、峰村康広「確かな連帯への志向——宮本百合子『貧しき人々の群』を読む——」(『近代文学研究』一九九八年二月)でも論じられている。
- 9 たとえば、比較的近年でも、「私」自身が立ち会っていない場面を「私」が語っていると見なすことには「無理がある」という見解が示されている。(池田啓悟「慈善と信念をめぐる——宮本百合子『貧しき人々の群』論『立命館文学』二〇一七年八月、七八頁)
- 10 シュタツェル前掲書、二一九頁
- 11 同前、三二頁
- 12 ルカーチ・ジェルジュ「物語か記述か」(浦野春樹訳、『リアリズム論』(ルカーチ著作集8)一九六九年五月、白水社)一七四頁

- 13 同前、一八一頁
- 14 同前、一八二頁
- 15 同前、二〇四頁
- 16 同前、二〇〇〜二〇一頁
- 17 同前、二〇二頁
- 18 山田新一「宮本百合子論——『貧しき人々の群』と『彌生様宮田』について——」(『立教大学日本文学』一九五九年一月)が「主題発展の第一の契機」を認めているように、この場面は重要な意味をもつ。
- 19 付言すれば、このような作中人物の意識とそれが現実にもつ意味との齟齬を浮彫りにする心理描写の方法は、トルストイのものでもあった。たとえば、『貧しき人々の群』に影響を与えたとされる小説「地主の朝」の冒頭で、主人公のネフリーュードフは「私はこのたび、自分の一生の運命にかかわるような決心をしました。私は田舎に自分の生涯をささげるために大学をやめようと思っています。じつは、自分が田舎のために生まれてきたような気がしているからなのです」という使命感を吐露する手紙を叔母あてに送っているが、語り手はその手紙が「まだかたまっていないような、子供っぽい筆跡」で書かれていたことを伝えることで、ネフリーュードフの考えが空想的なものにすぎないことを暴露している(中村白葉訳『トルストイ全集』1、一九七三年一月、河出書房新社、三三三頁)。
- 20 シュタツェル前掲書、二一六、二一七頁
- 21 伊藤野枝「彼女の真実——中條百合子氏を論ずる——」(『文明批評』一九一八年一月)
- 22 ルカーチ「芸術と客観的真実」(浦野訳、前掲書)三〇頁
- 23 永井聖剛「経験と伝聞——『重右衛門の最後』と『遠野物語』における〈事実〉の語り方——」(『自然主義のレトリック』二〇〇八年二月、双文社出版)
- 24 十川信介「『自然』の変貌——明治二十五年前後——」(『文学』一九八六年八月)は、上記の展開を「自然の風景と人事との裂け目」からの「本能としての自然」の「せり出し」(五七頁)として図式化している。
- 25 松村友視「田山花袋『重右衛門の最後』論——その史的立場づけをめぐる——」(岡保生編『近代芸文新放』一九九一年三月、新典社)が「第二の自然」は明らかに「自然ならざる自然」としての否定の意であるとみななければならない(六三頁)と明快にまとめたように、ここで自然は自らを否定しつつ発展するものとして捉えられている。
- 26 秋田雨雀「真人道主義作家の生れるまで(小集の草稿)」(『読売新聞』一九一八年一月一六日)一八日
- 27 それでは第二の上昇期の代表的テキストは何かという疑問に対しては、さしあたり『お目出たき人』(一九一一年二月、洛陽堂)をはじめとする武者小路実篤の作品を挙げておきたい。その思想における「自然」概念の重要性(その内実は異なるにしても)によって花袋と武者小路はつながるし、百合子もは出発期に武者小路の作品を愛読していた。
- 28 高橋敏夫「パノラマの帝国——『重右衛門の最後』論への序——」(『国文学研究』一九九〇年三月)は、本作における様々な「自然」を「分類し秩序づけるという語り手の位置」を指摘し、その特権的位置を象徴するものが語り手の「パノラマ的なまなざし」であると述べている(一三一頁)。
- 29 『重右衛門の最後』の語りの構造においては、物語の枠づけが前(第一章)からのみなされて、後(最終章)からはなされない点も注目される。これによって、枠づけられた語りに対する枠づけの語りによる相対化の効果はいわば「流れ」てしまっている。これに対し、たとえば前後両方から(さらに挿間的にも)枠づけられる同時期の国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」(『小天地』一九〇一年一月)では、特に後からの枠づけによって、枠づけられた物語の

30

内容が相対化され、その語り手の相貌が前景化される。兩雀前掲文が特に評価した自然主義作家は独歩であったことにも注意したい。

格清前掲「『貧しき人々の群』の虚構性」は、「全知的な視点」から描写されたこの場面が、「それまで理想を追求する主人公の独白的な語り」で展開されてきた物語世界を引き締める働き」をしているとする（六六―七頁）。また、峰村前掲論文も、「超越的ななものかへと逃げ込もうとする「私」を善馬鹿の死が相対化する」（一二頁）とまとめている。

*本文の引用は宮本百合子「貧しき人々の群」（『中央公論』一九一六年九月）および田山花袋『重右衛門の最後』（一九〇二年五月、新声社）による。旧字を新字に改め、ルビは適宜省略した。

*本論文は、JSPS 科研費 23K00300 の成果の一部である。

小堀 洋平（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）

（令和五年十一月二十四日受理）